

「なちよだが判らない。こんどあ汝あ行つてみる。」

「お。」

おしまひの一疋がまたそろそろ出て行きました。みんながおもしろさうに、ことごと頭を振つて見てゐますと、進んで行つた一疋は、しばらく首をさげて手拭を嗅いでゐましたが、もう心配なものもないといふ風で、いきなりそれをくはへて戻つてきました。そこで鹿はみなびよんびよん跳びあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取つてしめば、あどは何つても怖つかなくない。」

「きつともて、こいづあ大きな蝸牛の早からびだのだな。」

「さあ、いゝが、おれ歌うだふはんでみんな廻れ。」

その鹿はみんなのなかにはひつてうたひだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭をまはりはじめました。

「のはらのまん中の めつけもの

すつこんすつこの 栃だんご

栃のだんごは 結構だが

となりにいからだ ふんながす

青じろ番兵は 気にかがる。

青じろ番兵は ふんにやふにや

吠えるもさなれば 泣ぐもさな

瘠せて長くて ぶぢぶぢで

どごが口だが あだまだが

ひでりあがりの なめぐぢら。」

走りながら廻りながら踊りながら、鹿はたびたび風のやうに進んで、手拭を角でついたり足でふんだりしました。嘉十の手拭はかあいさうに泥がついてところどころ穴さへあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかにになりました。

「おう、こんだ団子お食ばがりだぢよ。」

「おう、煮だ団子だぢよ。」

「おう、まん円けぢよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになつて、四方から栃のだんごを囲んで集まりました。そしていちばんはじめに手拭に進んだ鹿から、一口づつ団子をたべました。六疋めの鹿は、やつ

と豆粒のくらゐをたべただけです。

鹿はそれからまた環になつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のやうな気がして、いまにもとび出さうとしましたが、じぶんの大きな手がすぐ眼にはひりましたので、やつぱりだめだとおもひながらまた息をこらしました。

太陽はこのとき、ちやうどはんのきの梢の中ほどにかかつて、少し黄いろにかゞやいて居りました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになつて、たがひにせはしくうなづき合ひ、やがて一列に太陽に向いて、それを拜むやうにしてまつすぐに立つたのでした。嘉十はもうほんたうに夢のやうにそれに見とれてゐたのです。

一ばん右はじにたつた鹿が細い声でうたひました。

「はんの木」

みどりみぢんの葉の向さ

ぢやらんぢやらんの

お日さん懸がる。」

その水晶の笛のやうな声に、嘉十は目をつぶつてふるへあがりました。右から二ばん目の鹿が、俄かにとびあがつて、それからからだを波のやうにうねらせながら、みんなの間を縫つてはせまは